

チャールス・エイミイ・カッター

Charles Ammi Cutter

堀内郁子

Ikuko Horiuchi

Résumé

As one of the greatest librarians in the history and as the most librarian-like librarian, Charles Ammi Cutter is introduced to the Japanese new comers into library profession. His three major contributions to library science and other activities, his home and private life, etc. are described.

はじめに

- I. おいたち
- II. ハーバード大学図書館時代
- III. ボストン・アセニアムの蔵書目録
- IV. カッターの目録規則
- V. 展開分類法
- VI. カッター著者記号表
- VII. フォーブス図書館
- VIII. その他の活動
- IX. 家庭と私生活

はじめに

現在わが国では日本語による図書館学の文献はまだ少なく、少しづつこんだ勉強をしようとすれば、外国の文献に頼らねばならず、その外国の文献も十分に集められ、手軽に利用できる所が少ないので不便を感じる人が多い。そこで思いついたのが、図書館史上、特に西洋

図書館史上重要な人物の、人と業績のあらましを日本語でまとめておきたいということである。そして図書館史上でも現代図書館学の基礎をきずいた人びと、現在われわれが仕事をするのに直接の恩恵をこうむっている人びとの中から、最も図書館員らしい偉大な人物としてまずとりあげたのが Charles Ammi Cutter である。

堀内郁子： 慶応義塾大学文学部図書館・情報学科事務主任

Ikuko Horiuchi, Executive Secretary, School of Library and Information Science, Keio University.

I. お い た ち

米国ニューイングランド地方の開拓者は、勤勉で、質素で、信心深く、高い理想を持った人びとであるとの定評があり、その子孫達もそういう祖先を誇としていた。C. A. Cutter もそのような家系に生れた。1640 年項 Elizabeth Cutter という寡婦が 2 人の息子連れて英国の Newcastle-on-Tyne からアメリカに渡り、Massachusetts 州の Menotomy (現在の Arlington) に住みついたが、Cutter 家の人々は皆この子孫である。Cutter の家は元来農家であったが、一族の中には大工、商人、宿屋、製粉業者、牧師、医者、軍人などもでたが学者はいなかった。Charles Ammi Cutter は 1837 年 3 月 14 日にボストンの Charter Street 65 番地で魚油商の Caleb Champney Cutter と Hannah Cutter の間の次男として生れた。チャールスは幼ない頃体が弱く極端な近視眼であったから、兄弟達が商売のために家を出てボストンを去って行っても、家にとどめられ、牧師にでもしようと考えられていた。父の姉妹である独身のおば達が家族の一員として同居していたが、このおば達は教養があり信仰の厚い人達だったから、チャールスを牧師にしようという考えは彼女達から出たものらしい。

1851 年チャールスは Hopkins Classical School を卒業した。この学校は 1770 年頃 Edward Hopkins という資産家の遺産によって創られた学校で、ハーバード大学に入学し続いて神学校に入ろうとする若者には学資を与える予備校で、学校名の通り古典の勉強を中心に聖書をも学ばせた。学校の勉強のあいまにはおば達が、絵画、音楽、文学等を教えこんだので、チャールスは生涯これらの方面の趣味が豊かで、これらに深い愛着をもっていた。当時米国全土をみわたして最も知的水準の高い所はマサチューセッツ州ケンブリッジで、その中心はハーバード大学であった。チャールスは眼が悪かった関係で、子供の時から他の腕白少年達のように屋外であばれまわって遊ぶというようなことがなく、学校で勉強している時以外はおもに読書で時をすごした。彼の読書欲、読書力は絶大であったから、その文学趣味は極めて程度が高く、大学に入学する以前からハーバード大学図書館の本を借覧していたらしい。

チャールスは 14 才でハーバード大学に入学した。しごくまじめで良心的で、いかにも神学を学ぶにふさわしい学生であった。しかし彼の学位授与式の際の演説は宗教的な題目ではなく、「諷刺作家としてのサッカレー」と

いう文学の分野のものであった。1855 年 82 人中 3 番の成績で卒業し、Phi Beta Kappa (優等生で組織する米国最古の学生友愛会) に選ばれた。この頃の彼の写真を見ると、しなやかな巻毛の美しい、面長で上品な、眉目秀麗な若者であった。

ハーバード大学卒業の翌年の 1856 年にチャールスは神学校に入学し、1859 年に卒業した。ここでも彼は勤勉な学生で、論文を書いて、有名な Bowdoin 賞という賞を受賞している。

チャールスの生いたちを一言にしていえば、教養豊かな知的環境に恵まれた家庭に育ち、経済的にも適度に恵まれ、当時としては最高の、牧師となるための教育を受けたのである。

II. ハーバード大学図書館時代

チャールス・カッターは神学校を卒業後、ケンブリッジの教会で何回か説教したが、どのような話をしたかは、書きとめたものが残っていないので今日ではわからないのは残念なことである。しかし彼は結局牧師にはならなかった。神学校在学中の一つの経験が、彼の人生の進路をかえさせることとなった。当時牧師の職は経済的に安定し、社会的にも尊敬を受けた職業であったが、図書館で働くということは専門の職業としては認められていなかった。しかしカッターは後者を選んで、自分自身で図書館員を専門の職業としてのレベルにひきあげる役割を果たしたのである。

1856 年カッターが入学した年、神学校ではドイツのゲティンゲン大学の Lücke 教授の蔵書を手に入れた。これは、5,000 冊程もある大コレクションで、当時神学校の図書館がもっていた全蔵書に匹敵するものであった。この機会に大学では図書館の蔵書を再整理して分類し、新しい目録を作ることを決定した。カッターは、ハーバード大学図書館の目録責任者の Ezra Abbot 博士の推薦でこの仕事に雇われ、また Charles Noyes という青年も雇われて、2 人でアルファベット順の目録を作った。これは 2 冊のフォリオ版の冊子におさめられたが、後半の図冊はカッターの手書きによるものである。これはこの 1 書館唯一の目録として長く使われ、カッターの特長のある美しい筆跡を見ることができた。

カッターは神学校を卒業して間もなく、ハーバード大学図書館で前述のアボット博士の助手となった。ここでも図書館の目録を作りなおす計画がたてられ、カッターはこれに参加することになった。当時できていたハーバ

ード大学図書館の目録は、1830年までに受入れた図書については2冊の冊子体目録があり、次の4年間分の図書については別冊の補遺があり、1833年から1850年までの稿本やパンフレットの目録は8冊のフォリオ版にはりつけてあり、その他の資料についてはカード目録になっているという具合で、誠に複雑で不便であった。しかもこれらの目録は閲覧者のために公開されておらず閲覧者が目録を見るには、いちいち図書館員に頼んで見せてもらうというしくみになっていた。アボット博士は新しく目録を作るにあたり、閲覧用目録はすべてカードに記入することとし、著者名目録と分類目録の二つに分割することにきめた。分類目録は分類項目をアルファベット順に配列し、各項目の中の小項目もまたアルファベット順にならべるという方法にした。1860年から1868年までの8年間、アボットとカッターの2人の学者は、当時米国最大の図書館で目録作りに精根をかたむけた。約10万冊の図書とはほぼ同数のパンフレットは質的にも米国最良のコレクションであったが、2人はもちまへの丹念さと几帳面さで1冊1冊をよくしらべ、正確に記述していったので、目録ができあがるまでには立派な書誌学者となった。2人はまた勤勉でうむことを知らなかったから、このほかに高等学校図書館の目録、神学校図書館の目録も作ったが、その余暇に William Rounseville Alger の著作 *Critical history of the doctrine of a future life* の附録として書誌を作ったが、その書誌がきわめて充実した立派なもので、5,000 ちかくの項目と著者と主題の索引がついて、印刷して230頁にわたるものであった。この書誌作りからカッターも書誌作りに興味をもつようになり、妖怪と魔女に関する文献を集めはじめ、終生それを続けたが、その書誌は不幸にも出版されることがなかった。

2人が作ったハーバード大学図書館の目録は、カードに手書きで記入し、閲覧室の抽出しに入れて利用者が直接使えるようにしたもので、当時としては全く新しいスタイルの目録であったから、他の図書館の人びとの注目の的となった。この目録が米国ではじめての閲覧者用のカード目録である。この目録の詳細についてはカッター自身が *Special report on public libraries*¹⁾ に書いている。

III. ボストン・アセニウムの蔵書目録

1868年12月14日にカッターは Boston Athenaeum の館長に選ばれた。ボストン・アセニウムは会員制図書

館 (proprietary library) で、図書館というものを公費でまかなって、人びとに無料でサービスするという考え方が生れる前には、最も普通の図書館のあり方で、19世紀の米国ではこの種の図書館が盛んであったが、その中でももっとも有名なものがボストン・アセニウムであった。

ボストン・アセニウムは、ボストンの名門の人びとによって創立され、この都市を文化的に有名にした人びとが会員として名を連ねていた。たとえば、詩人の Henry Wadsworth Longfellow、小説家 Nathaniel Hawthorne、思想家 Ralf Waldo Emerson、ウェブスターの辞書で有名な Noah Webster 等である。このように著名な文化人、富裕な紳士を対象とした貴族的な図書館で、保守的なボストン社会で認められた人でなければ会員になれず閉鎖的であった。蔵書は高度な内容をもつ学術的なもので、カッターが館長に選ばれた1868年当時米国中で最もすぐれた蔵書の一つであった。しかしその目録はきわめて不統一で不完全なものが部分的にできているだけであったので、カッターはまたこの図書館の全蔵書の目録作りにとり組むこととなった。前の二つの図書館、ハーバード神学校とハーバード大学図書館で目録作りの経験をもったことは非常に役に立った。とはいえ、この目録作りは容易なことではなく、15年がかりでやっと完成した時、目録の最後の巻のあと書きにカッターは次のような文章を書いている。

この目録作りは数人の若者にまかされた。彼等は聡明で勤勉であった。しかし目録作業には全く経験がなく、また、多分ものを写すのに正確に書かなければならないという訓練を受けたこともなかったのであろう。彼等は書名のある時は本の背からとり、ある時は標題紙からとり、ある時は前扉からとり、またある時はあきらかに彼等自身の想像で書いた。勿論勝手に省略したり、省略する都合で語の順序を自由にかえたり、識別できない程の略書きをしたりした。彼等は著者の完全な氏名をしらべたり、無著者名図書や筆名による著作の著者をしらべるといようなことに時間をさくことはなかった。彼等の目的は早く仕事を片付けてしまうということにあったらしく、読めないような字が多く、特に著者名や日付に読めないものが多かった。……………²⁾

このような有様で何年も仕事が続けられていたが、図

書館評議員達はいよ目録がどのようなものかは全然理解がなかったから、早く印刷目録を完成せよとせきたてた。カッターは管理者としての仕事のほかにレファレンス・ライブラリアンを兼ね、また株主であり、会費を払っている会員、すなわち図書館利用者へのサービスをしながら、蔵書目録を完成しなければならないという状況は察するに余りある。目録を印刷に付する段になって、その原稿の大部分はそのままでは出せず、加筆、訂正しなければならなかった。それでもやっと第1巻ができたのが1874年、第2巻1876年、第3巻1877年、第4巻1880年、第5巻と最終巻は1882年に完成した。1頁2段組で、3,402頁に及び、約9万冊の蔵書を殆んど全部リストした。この目録は近代的な辞書体目録の最初のもので、その後の多くの辞書体目録の手本となったばかりでなく、完全な姓名をしらべたり、筆名から本名をしらべるのに非常に役に立った。この目録はカッターの三大功績の一つにかぞえられ、Justin Winsorは現存の目録で最良のものといったし、William E. Fosterは、“1874年現在、アメリカの書誌的事業のうち、偉大さと完全さにおいて殆んど唯一無比のものである”³⁾と述べている。

IV. カッターの目録規則

ボストン・アセニウムの目録作りに関連して、カッターは第2番目の大きい業績を残した。目録を作るに当たっては基本的な方針やこまかい規則が必要であったので、カッターは、目録の第1巻を出した後、作業をしながらまとめたものを、1875年に *Rules for a dictionary catalog* として発表した。これまでに目録についての原則とか系統的にまとめた規則というようなものは全然なかったから、カッターの規則が発表されるや、非常な反響を呼び歓迎された。

1876年はアメリカ合衆国の建国100年目にあたり、米国はその発展を世界に示すため、第1回の万国博覧会を催すこととなった。この博覧会の展示に附随して、教育局では、この国の図書館に関するあらゆる情報を集めて報告書を作った。この報告書 *Public libraries in the United States of America* には、図書館の歴史、公共、大学、医学、法律、神学、科学の各種の図書館の完全な統計、当時活躍していたすべての有力な図書館員の経験が記録されている。例えば、Poole, Winsor, Fletcher, Dewey, Billings, Spofford 等が執筆しているが、ボストン・アセニウムの目録のすばらしい出来ばえで有名に

なっていたカッターも依頼されて、図書館目録について1章を執筆した。その中でカッターは1876年現在の図書館目録の状況、当時行なわれていた各種の目録の形態を解説し、それぞれの長所、短所を述べた。

カッターが *Rules for a dictionary Catalog* を発表するや、これはこの報告書 *Public libraries in the United States of America* の第2部として出版された。増補第2版は1889年に出版され、第3版は更に増補改訂され索引を付して1891年に出版され、第3版までで約35,000部頒布された。第4版は著者の死後甥の William Parker Cutter が遺稿をまとめて編集し1904年に出版した。カッターが書き遺していた序文の中には次のような文章がある。

利用者の便宜は常に目録系の都合に優先すべきである。多くの場合それは一致する。例外のない簡単な規則は守り易いばかりでなく利用者にとってもわかり易く使い易い。しかし規則の適用に厳しく一貫性を保ち、一定不変であろうとすると、時には大衆のものの見方の習慣と合致しないことがある。もしこのような習慣が一般に広く受け入れられ、深く根をおろしている場合は、たとえそれが、統一性と単純さを犠牲にするとしても、目録係がそれを無視するのは賢明なことではない。……

目録を作ることは技術であって科学ではない。いかなる規則も経験や健全な判断に代ることはできない。しかし、経験の成果は規則によってもっともよく示される場合もある。⁴⁾

上の文章によってもよくわかるように、カッターの規則を貫く精神は非常に实际的で、民主的で、常識的で、親切である。

この規則は辞書体目録全体をカバーする規則を含み、件名標目を組織化して、件名カードを著者名カード、書名カードと一緒に一本のアルファベット順のファイルの中にくりこむための原則をたてた。この規則ができてから、図書館界、特に米国の図書館界では辞書体目録の形式が爆発的に盛んになり、他の方式の目録はほとんど見られなくなった。カッターの規則は彼の死後米国内ばかりでなく国際的に広く、永く影響力をもち、その精神は Margaret Mann や Seymour Lubetzky や Paul S. Dunkin に受けつがれ、1961年のパリでの国際目録会議を経て、1967年に出版された英米目録規則にも生かされている。

V. 展開分類法

カッターの図書館学に対する三番目の偉大な功績は彼の展開分類法 (Expansive Classification) である。これも彼がボストン・アセニウムに在職中に着手したものである。当時アセニアムの蔵書は100,000冊をこえ、会員には自由接架方式をとっていたので蔵書を再編成する必要が生じていた。カッターは米国図書館協会の第1回大会に出席した直後から、アセニアムの蔵書を組織するための分類体系を作ることを考えはじめた。彼は最初デュイーの分類法の十進記号にひかれたが、ボストン・アセニアムのように蔵書がかなり多く、精密な分類を必要とするところには適さないと判断して、アルファベットの文字を記号として用い、形式区分と地方細目には数字を用いることとした。この分類表ができあがって、マサチューセッツ州レキシントン市の Cary Memorial Library で最初に採用されると、ほうぼうの図書館から自分の図書館にあわせて使用したいという要求がきた。そこでカッターは村の小図書館から国立図書館までの各種の大きさの図書館で使えるように7段階に展開することとした。そのために展開分類法 (Expansive Classification) と名づけられているのである。第1次の分類はごく小さい図書館用で、

- A 総記
- B 哲学 宗教
- E 伝記
- F 歴史
- H 社会科学
- L 自然科学 技術
- Y 文学
- Y f 小説

の8区分とした。

第2次分類では、第1次の8類の他に

- G 地理および旅行記
- M 博物学
- O 医学
- R 有用技術
- V レクリエーション、スポーツ、演劇、音楽
- W 美術

を加え、Fの歴史の所は地理区分を付した。更に第3次、4次と6次までの展開をおえ、すべてに索引をつけて160頁のパンフレットとして1891年から1893年に出版した。第6次の展開ができたところで、米国では約100

の図書館でこの分類表を採用していた。⁵⁾

第7次の分類表は、不幸にもカッターの死亡ということで完了しなかった。しかしカッターの展開分類法は図書館の諸分類体系の中で最も論理的で学術的であるとみなされ、米国議会図書館が新しく分類体系を作るにあたっては、その基礎となった。日本十進分類法も、主題の配列順序は展開分類法に従ったとその序説に明記してある。カッターの展開分類法については、英国の分類の権威である W. C. Berwick Sayer がその代表的著作 *A manual of classification for librarians and bibliographers*⁶⁾ に詳しく紹介している。また M. F. Tauber の *Classification systems*⁷⁾ には、展開分類法に関する文献を網羅的に集めて要点を引用してある。

VI. カッター著者記号表

展開分類法は、時代の変化に応じて改訂を加える後継者がいないことと、米国議会図書館の分類法が普及したため、現在この分類表を使っている図書館は殆んどないが、この分類法に附属してカッターが創り出した著者記号表は、今でも広く世界中で使われていて、カッターの、ほかの業績を知らない人でも、カッター著者記号という名前を知らない図書館員はいない。これは各部門に分類された図書を著者名のアルファベット順に配列するため工夫したもので、著者名の頭文字1字または2字を取り、その後に数字をつけて著者名を記号化するための表である。この方式を日本の場合に適用したのが森清氏の日本著者記号表である。カッターの表は二つの部分からなり、はじめはSをのぞく子音の部、次は母音とS部とし、それぞれの文字のあとに2けたの数字を配当してある。これはたくさんの蔵書をもつ大図書館用としては不十分であることがわかり、カッターの指示によって Kate Sanborn が数字3けたの表を作った。これをカッター・サンボーン著者記号表という。しかしこれはカッターの最初の表を基礎として展開したものでなかったため、カッターは自分で第3の表を作った、したがってカッター著者記号表は、2けたのカッターテーブル、3けたのカッター・サンボーンテーブル、3けたのカッターテーブルの異なった3種類がある。

VII. フォーブス図書館

1893年にカッターはボストン・アセニアムの館長としての任期がきれるにあたり、次期の館長になることを辞退し、評議員諸氏もそれを認め、後任には William C.

Lane がきまった。ボストン・アセニウムは、ボストンのエリート諸氏によって維持されていて非常に保守的であったから、カッターの民主的な改善や業績を理解せず、むしろ急進的な変更に眉をひそめていたので、カッターも窮屈に感じ、もっと自由に仕事ができる所へ行きたいと願っていた。とはいえ、ボストン・アセニウムを非常に能率的な図書館にし、世界中にその名を知らしめたのはカッターである。

カッターがボストン・アセニウムに在職していた頃、マサチューセッツ州のノーザンプトン市に Charles Edward Forbes という独身で富裕で少しかわり者の法律家が住んでいた。彼はその財産でノーザンプトンに図書館を建設するよう遺言を書きのこしていた。市当局はフォーブスの死後図書館建設を10年間延期し、遺産の利息をふやして建築費用のほかに充分の図書購入費を蓄えた。そしてその頃ボストン・アセニウムを辞めたカッターに館長になるよう要請し、カッターはそれを引受けた。カッターは久しい以前から心に温めていた計画を実行する機会を得たことを喜んだ。新しく蔵書を作り、それらを彼の思い通りに分類し、批判を受けずに彼の定めた規則に従って目録を作ることができる。もっと大切なことは、図書館はいかに公衆にサービスすべきであるかという彼の日頃の考えを実行に移し、発展させる機会を得たのである。フォーブス図書館の周辺には Smith College や Amherst College 等有名な大学があり、活発に活動している Springfield Public Library があり、また商工業地帯を控えていて、カッターが腕をふるうには大いにやりがいのある地域であった。彼は早速収集すべき図書のリストを作り、ヨーロッパへ渡り、1か月をついやしてすばらしい資料を集めた。彼は図書館の中に美術と音楽の部門を作ろうと決めていたから、図書のみでなく、絵画や楽譜等も収集した。この時代にこのようなことを試みる機会は無かったが、幸いこの図書館にはカッターの邪魔をする図書委員会も、教授も、学校理事もいなかった。彼は図書選択の方針を次のように述べている。

我々は最良の図書を買うべきである………これはある特定の図書館にとって最良であることを意味する。すなわち利用する人びとにとって最良の本ということである。使われない本は良書ではない。図書館員にとって最良の本ではなく、図書委員会にとって最良の本でもなく、図書館の外部の自称図書委員のための良書で

もなく、書棚のための良書（決して棚からとり出されることのない）でもなく、我々の図書館の利用者が、楽しみと、知識と、心の刺戟と、インスピレーションを求めてきた時、それらの要求にこたえるための最良の本を買わなければならない。図書館は利用される実用的なものであるべきで、称讃されるべき理想ではない。………過去1世紀の図書館の全歴史をまとめると次のように言うことができよう、即ち、それらは皆ある特定の1人に適する図書館であって、100万人の人びとには不適當な図書館であった。

フォーブス図書館はノーザンプトン市民1人あたり約1ドルの図書購入費をもっていた。それで新刊の小説以外は利用者に冊数の制限なしに本を貸し出した。絵画も楽譜も貸し出した。1度に絵画の展覧会分全部を貸し出すこともあった。児童や学校の生徒にもサービスした。利用者から要求があればそれを購入して提供し、身元の確かな人にはどんな遠方から来た人にも貸し出した。郷土資料も収集し、特に稿本を集めたので、郷土史家や系譜学者のための宝庫となった。

フォーブス図書館にとって唯一つ困ったことは、この図書館に対して市当局は充分な経費を支出しなかったことで、館員に充分な給料を支払うことができなかったことである。しかしこの図書館には若い優秀な婦人達が働き続けていた。これは主として館長の人徳によるもので、彼等は安月給とりには珍らしく団結心があった。

カッターはこのフォーブス図書館に在職中病を得て1903年9月6日66才で死去した。そして甥の William Parker Cutter が次の館長の職をひきつしたが、その時彼は、フォーブス図書館に登録している人の数は住民の人口に比して極めて大きい割合をしめ、1人あたりの図書貸出し数も、1日に図書館を訪れる利用者の数もほかの図書館にくらべて非常に多いことを発見した。これらはすべてチャールス・カッターの市民に対する姿勢がもたらした結果にほかならない。

フォーブス図書館は、あくまでも利用されることを目標とし、めんどろな規則は何もなかった。内部は家庭的な雰囲気、図書館を訪れた人は心から暖かく迎えられた。子供達も歓迎されたし、彼等も行儀よくふるまった。近くの大学の教員や学生、高校生などがしばしばやって来た。遠くの小さな町でフォーブス図書館から借り出した絵画や美術品で展覧会を開いたり、コンサートを開いたりした。土地の新聞に図書館の資料や行事を載せ

PR活動も盛んに行なった。このように図書館が市民の生活向上のために真に役に立つ存在となっていた。

VIII. その他の活動

カッターは、これまで述べた三つの大きな業績のほかに、American Library Association (ALA) の結成とその発展にも大いに貢献した。1876年に ALA が結成され、第1回の大会を10月にフィラデルフィアで開いた際、約100人の熱心な図書館人が集り、カッターも参加して活発に討議した。カッターはそれ以後毎年の大会にかかさず出席し、特に目録関係に熱心で永い間目録部会長を務めた。1888年と1889年の2年間は協会の会長を務め、1889年のセントルイスの大会では、“Common sense in libraries” という題で講演を行なった。これは図書館で起るいろいろな問題に彼がいかに穏健に分別をもって対処したかを例示する内容のものであった。その他、図書館協力委員会の委員長となり、出版委員会の委員にもなった。協会が真に発展をとげたのはこれらの委員会の活動を通してであり、カッターはその原動力であった。

カッターは、編集者としてもすぐれた業績を残し、ALAでの編集活動のほかに雑誌 *Library Journal* の編集に貢献した。*Library Journal* は新しい図書館運動における世論の代弁者として重要な役割を果たしたが、カッターは1881年の創刊以来、地味で骨の折れる仕事をひきうけ、この雑誌の書誌欄を担当した。また1881年から1893年までは編集長となり、衰退の傾向にあったこの雑誌の勢を盛りにかえした。また執筆者としても *Library Journal* や *Nation* や *New York Evening Post* 等にしばしば寄稿した。

カッターはまた図書館学教育のためにも力を尽し、Dewey の設立した New York State Library School を全面的に支持し、コロンビア大学でも、アルバニーのニューヨーク州立大学でも講師として講義をした。またボストン・アセニウムでも、フォーブス図書館でも、現職者教育に力をいれ、館員の資質の向上を計った。カッターの下で働いたことがあるということは、それ自体有力な推薦状の役割を果たした。図書館人としての使命感に溢れたカッターの影響力は、マサチューセッツ地方の図書館界に広くゆきわたった。

IX. 家庭と私生活

カッターがアボット博士の助手としてハーバード大学

図書館で働いていた頃、やはり同じ図書館に勤めていた Miss Sarah Fayerweather Appleton という婦人と知りあい、やがて1863年5月21日に結婚した。4人の息子をもうけたが、2人は若くして死んだ。あとの2人はいずれもマサチューセッツ工科大学に学び技術者となった。甥の William Parker Cutter がチャールス・カッターの仕事ををひきつぎ、その遺稿を整理して *Rules for a dictionary catalog* の第4版を出版し、展開分の類法第7表の完成に努力し、フォーブス図書館の館長をきひつぎ、またカッターの伝記を書いた。カッターはその人となりと良き妻とのおかげで、円満で教養の豊かな、明るい家庭をつくっていたから、そこは親せき、友人、図書館員達が好んで訪れる楽しい場所であった。

カッターは、スポーツとしては登山を愛し、アペラチャン・マウンテン・クラブの会員となり、サイクリングや乗馬も楽しんだ。カッターは働く時は良心的に一生懸命仕事にとりくんだが、遊ぶ時もまた精一杯遊びに打ち込んで、ほかの事はすべて忘れて遊びを楽しんだ。夏には知人と一緒にカナダのクエベックの森へでかけ、そこに質素なクラブハウスを作って、新聞やラジオのない静かな大自然の中で泳いだり、カヌーをあやつったり、鱒を釣ったり、夜はポーカーに興じたりした。味覚も発達していたので、おいしいものをたべよいぶどう酒を飲むのも好きだし、新しい料理をためしてみるのも好きだった。彼はまた芝居や音楽会に行くのも好きで、フォーブス図書館に働く人達はよく彼から切符をもらった。文学や絵画の趣味も深く、ユーモアのセンスがあった。

カッターの死んだ直後 Western Massachusetts Library Club の会合が開かれた時、追悼文が読まれたが、その一節に “……このようにカッター氏をライブラリアンとしての天才としてたたえると同時に、我々の間からその軽快な姿、明るい顔つき、才気縦横な会話、希望にみちた暖かい心が永久に消え失せたことは、絶体にとりかえしのつかない損失である……”⁹⁾ とあるように、参加者一同に心から彼の死を歎かせたのであった。

- 1) U. S. Bureau of Education. *Public libraries in the United States of America*. 1876 report. Part I. Champaign, Ill., Graduate Schol of Library Science, University of Illinois, 1968. p. 540-541, 547.
- 2) Cutter, William Parker. *Charles Ammi Cutter*. Chicago, American Library Association, 1931. p. 18.

- 3) William E. Foster. "Charles Ammi Cutter; a memorial sketch," *Library journal*, Vol. 28, Oct. 1903, p. 698.
- 4) Cutter, Charles Ammi. *Rules for a dictionary catalog*. 4th ed. Washington, Government Printing Office, 1904. p. 6.
- 5) Cutter, William Parker. *op. cit.*, p. 44.
- 6) Sayer, W. C. Berwick. *A manual of classification for librarians and bibliographers*. 3d ed. London, Deutsch, 1959. p. 141-150.
- 7) Tauber, Maurice F., and Edith Wise. *Classification systems*. Vol. 1 (Part 4 of the *State of library art*) New Brunswick, New Jersey, Graduate School of Library Service, Rutgers—the State University, 1961, p. 108-139.
- 8) Cutter, William Parker. *op. cit.*, p. 35.